

令和3年度 県内教育関係機関研修 報告座談会

令和3年10月29日（金）教育会館講堂にて「大町市立大町北小学校、大町市立第一中学校へ視察研修した報告座談会」が行われました。

昨年は新型コロナウイルス感染症対策のため、県外教育機関視察研修を実施することができませんでした。今年度も県外の感染拡大状況に鑑み、視察を県内の先進校とし、日帰りでの実施といたしました。会員へのアンケート等をもとに検討した結果、「協働の学び」を軸にした取り組みを進める両校を訪問しました。報告座談会の参加者は50名余、とても活発な意見交換が行われました。内容は以下の通りです。



1 全体会Ⅰ

- (1) 会長挨拶 上伊那教育会長 原 文章先生（高遠小）
- (2) 研修の概要説明
大町北小：中谷 弥哲先生（箕輪中部小）
第一中：大木島 学先生（西箕輪中）
講演会：伊藤 尚哲先生（宮田小）

2 座談会（司会、記録を研修参加者で分担）

* 5つのグループに分かれ、座談会

3 全体会Ⅱ

- (1) グループで話題になったこと発表
- (2) まとめ挨拶 上伊那教育会研修部長 原 浩範 先生（箕輪中部小）

研修の概要説明



大町北小学校 中谷 弥哲先生（箕輪中部小）

机の上に長さの違う鉛筆やペン、消しゴム、キャップを並べている児童の様子から、ありのままの姿で自分の教室にいられること、クラスの友達と同じ場所で時間を共有できること、その子の姿がクラスの友達から受け入れられていることに大きな価値を感じた。大町北小学校の授業改善の根底には、授業を通してどのような子どもたちを育てていきたいのかということ。目の前の子どもを見つめ、質の高い授業によって、知識・技能のみではなく、問題解決に必要となる考える力や協働する力を重視

し、一生学び続けていく「ひと」を育てていくことに全力を注ぐことを教育理念として、全職員で「協働の学び」による授業改善が行われていた。

新たな単元の学習を始める前に、単元の学習を貫く中心概念を考え、「何を」「どのように」学ぶかを意識し、単元を構想した上で単元の導入を考えていた。単元を貫く中心概念は、小・中で連携して取り組んでいて、子どもたちにも、マインドマップという形で示され、毎時間振り返りとして、1時間の授業の中で自分が得たもの、学んだことを書き留めていた。小中の連携についても学ばせてもらった。

研修の概要説明

第一中学校 大木島 学先生（西箕輪中）

「聴く学校」を教育理念に「ビジョン実現に向けて」学校改革に取り組んできた。外化、対話、内省、内化を通して深い理解、深い学びにいたろうとする流れです。授業では、共通して、マインドマップ、OPPシート、学習シート等を用いて、生徒が話し合い、学習を進めている。3年生の数学の授業では互恵的な語り合いが成立していた。一人が教え、片方は聴くという立場だが、寄り添い、解き方、ヒントだけを教えていて計算や考えを述べているのは片方の生徒のみ。発表の場では、説明をしていた生徒が聞いていた生徒に発表を促し、発表させる。相手のことを考え、共感的に学習を進める姿が見られた。



講演会 伊藤 尚哲先生（宮田小）



塩原先生の講演骨子「協働の学び」と「学校づくり」の2つだった。協働の学びが熟練となると、生徒同士の関りが多くなり、結果的に先生がしゃべらなくなり、生徒の達成感や自己効力感が高めていくような学業発達を促す授業になっていく。学校づくりのビジョンとして教育理念は聴く学校。目指す教師像は、生徒一人一人をまるごと受け入れ、生徒の声や心の叫びに耳を傾けること。目指す学校像は、生徒を取り巻く環境を授業で解決する学校。学校づくりのねらいは、聴く学校を合言葉にする。協働の学びの実践を通して、論理的

的思考を高め、自立した学び手の育成をすること。ビジョンに対する思考活動、学ぶことの愉しさを体感する学校生活、授業に関する良質なコミュニケーション活動の日常化をすることで、資質・能力を育成することへの教育の質的転換、授業の質的改善が実現する。

皆さんにもこの3つのことはぜひ実現を目指してくださいとのことだった。

グループで話題になったこと

- ・教師の出しの重要性
- ・小中連携した協働の学びの取り組み、ビジョンをもった取り組み
- ・多様性をどう認めていくか。どう評価するか。周りの子がどう関わっていくか。
- ・「問い」の質
- ・必要感のある話し合い
- ・振り返りの評価
- ・協働の学びの中でICTの活用
- ・つけたい力と学習問題の重要性
- ・互恵的な関係、安心感
- ・意見を否定しない



参加者の感想より



・座談会形式にすることでたくさんの先生方の意見や悩みを聞くことができありがたかった。

『自律した学習者』とは自己で学習を調整する力があると感じた。“やり方を学ぶ”姿から“学び方を学ぶ”姿が深い理解に繋がっていくのだと思った。協働的な学習のためには“考えたい必要感”“グループで話したい必要感”“全体で発表する必要感”等が不可欠だと考えた。小学校の鉛筆を立てていたお子さんの発表から「受け入れる」ということばの意味について再考した。

・全体会ではなかなかわからなかったことを、座談会で細かくお聞きすることができた。「協働」という話し合いとなることが多いが、必要感のある話し合いが大切だと改めて思った。子どもが学校の中で一番多い活動は授業であり、その授業の中で「自己の有用感」があることで、主体的に学ぶ姿につながると思う。多様性、互いの尊厳を守ると絡めて主体的そして学び合いができる授業について改めて考えたいと思った。



・発表の中に、普段悩んでいるようなことがあり、教えていただいたり励ましていただいたりしてありがたかった。きく・つなぐ・もどすを意識して子どもが主体の授業づくりを心がけたり子どもたちにどんな力をつけさせたいかよく考えて単元構想をたてて日々の授業を大切にしていきたいと思った。

・研修報告だけでは詳しくわからなかったことを具体的に座談会で聞くことができ勉強になった。中学校での協働学習の様子も聞けて、小中の連携の大切さについても考えさせられた。自分がや

ってきた協働学習のやり方に、新しい方法や理念をお聞きして、少し視野が広がったように感じた。

・分科会の中で、普段協働的な学びをしようとしたときに悩んだことなどを出すことができた。必然性のある話し合いやマインドマップなど参考になる話題がたくさんありありがたかった。話題になった「問いの質」とも重要なキーワードだと思った。明日からの授業に生かしていきたいと思った。

・実際に研修に参加したくてもできなかった先生方にとっても同じような学びが得られとても貴重な機会となった。

